

保育園・幼稚園に通う乳幼児の家庭における絵本読み聞かせの実態

古相正美¹⁾ 岡本満江²⁾

In the Homes of Infants going to Nursery School or Kindergarten : How Do Protectors Perform Picture Book Story-Telling?

Masami Furuso¹⁾ Mitsue Okamoto²⁾

(2016年11月25日受理)

一 はじめに

まず、絵本の「読み聞かせ」という言葉については、「読みあい」「読みかたり」という語句が新たに提案されている。「読み聞かせ」に違和感を覚えるむきは、「聞かせる」ということに強制的なニュアンスを感じとるのだろう。「読みかたり」は「物語り」と同様の意味だと受けとれ、絵本を物語るということなのだろう。「読みあい」は互いに読みあうという意味で心と心のつながりを大切にするという主張から提案されているようだ。保育に対して「指導」を使うか「支援」を使うかということとも通じるように感じる。乳幼児に対する絵本・昔話は全て口承文芸でもあり、語ることを基本としている。したがって「読み聞かせ」という語句を使用しても、乳幼児に対して語るという意味は当然含まれることになる。また、子どもに対する読み聞かせは教育要領にある「心を通わせる」行為につながるのとは自明の事だと考えている。

さて、乳幼児に対する絵本の読み聞かせの効用については、「保育内容言葉」の教科書を中心に、一般に対する啓蒙書にも、様々な内容の事柄が記載されている。知育的な内容から情操的内容まで十数項目にも渡る内容が記されている場合もある。私は、それらを否定するわけではないが、軽々に賛同するわけにもいかない。学術研究に携わるものとしては、根拠のないことには賛同できない。読み聞かせは何の役に立つのかという学生の質問に対して、唯一答えることのできることは、想像力の育成である。動かない絵を、耳から入った情報によって頭の中で動かしていくという想像力を養う事ができるのは間違いない。それが、いずれ絵を伴わない耳からの情報のみで動かし、やがては目からの情報のみで動かすことができるようになる。しかし、目からの情報と耳からの情報とは、本質的な違いがある。これは、読字のLDを考えればわかりやすい。読字では困難を感じる人でも、耳

からの情報に対しては苦勞せずに理解することができる場合が多い。物語を聞くことと読むことは、根本的に違うのである。だからこそ、読めるようになっても「読み聞かせ」は有効なのである。

さらに、保育現場に足を運ぶことによって学んだことは「聞く力」の育成にもつながるということである。幼児の集中力は5分だとか15分だとか言われたりする。しかし、幼児は好きなことなら飽きずに続けることができる。泥ダンゴ作りに夢中になるとおやつを忘れるほどである。絵本を聞くことも、経験を積んでいけば、年長で1時間程度は十分に聞き続けることができる。これだけの「聞く力」が養われていれば、小学生になって机に座って授業を聞き続けなければならない日本の教育体制からはみだすことはない。それだけの集中力を「読み聞かせ」によって養うことができるのである。

保育現場から学び続ける中で、福岡市の保育士会の指導をおこなったことがある。その中で様々な事を学んだのだが、保護者への絵本に関するアンケートをおこなう事があった。保育者が知りたい情報をもとに、先行研究の中から類似した調査を探し、その内容と比較することによって、調査結果の比較をおこなうことができるだろうと考えた。出てきた結果については保育士の報告会の中で口頭発表はおこなわれたのだが、残念ながら論文の形にはできていない。この内容が埋もれてしまうことはもったいないと考えながら3年が過ぎた。このたび、福岡市保育協会・保育士会のご厚意により、論文として発表できる事になった。また、同時に北九州市の私立幼稚園でも同様の調査をおこなうことができたので、この内容をも合わせて公けにし、保護者の育児内容検証の一助になればと考えた。

二 先行研究

家庭における読み聞かせに関する研究は数多く、特に

近年、保育に関する論文の増加とともに増えている。その中で読み聞かせに対する母親の考えに着目した論文が1990年代に出され、そこで家庭での読み聞かせにも言及されている。

「幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討」(秋田喜代美・無藤隆『教育心理学研究』第44巻第1号 1996年)は読み聞かせに対する母親の意識が検討されたものだが、幼稚園児保護者220名のアンケート結果が公表され、「空想・ふれあい」という内省的意義を重視しているが「文字・知識習得」という知的な外生的意義を重視しているものもいること、別の幼稚園児保護者226人程度への調査より「絵本を20冊から50冊程度自宅に所有し、図書館や本屋へ2週間に1回程度連れて行き、家では読み聞かせを時々行い、読み聞かせをする時は10分・2冊程度読んでいる」という傾向が明らかにされている。

「幼児への読み聞かせに関する母親の考え」(今井靖親・金貞蘭『教育実践研究指導センター研究紀要』5号 奈良教育大学教育実践研究指導センター 1996年)では幼稚園児保護者112人に対するアンケートで、読み聞かせに対する態度が積極的なのは48.2%、要求時にというのが50%。読み聞かせ開始時期は生後6ヶ月以前11.6%、6ヶ月から1歳未満20.5%、1歳から2歳未満35.7%、2歳から3歳未満16.1%、3歳から4歳未満11.6%(以下略)となっており、目的は「想像力の発達」「言葉の発達」「本を好きになるため」などが多く、読み聞かせは「毎日」が8%、「ほとんど」が25.9%。「ときどき」は43.8%。時間は10~30分(2~6冊)、読む時間は、「望む時」か「寝る前」「時間のある時」で、蔵書は30冊以上が7割となっており、少なく見積もっても平均50冊程度になる。読む人は母親96.4%父親58.9%。蔵書数なども多い方で、この調査の結果は、かなり高い数字だと言える。

「絵本と親子交流に関する研究」(後藤ヨシ子・前田敦子『長崎大学教育学部紀要 教科教育学』43号 2004年)では、保育所・幼稚園児の保護者283名を対象にアンケートを実施し、読む人は父母とも47%、母のみ42.4%、父のみ0%。読み聞かせ開始時期は、父母とも読み聞かせをしている家庭の母親では、1歳未満が45.4%、1歳~1歳5ヶ月23.8%、同様の家庭の父親でも1歳未満33.3%、1歳~1歳5ヶ月23.7%。母のみ読み聞かせをしている家庭では1歳未満27.2%、1歳~1歳5ヶ月28.9%。いずれにしても、2歳5ヶ月までに8割以上の家庭で読み聞かせが開始されている。読み聞かせ回数は、父母ともに読み聞かせをする家庭は週に1・2回が16%、毎日以上が11%で、母親のみは1・2回が20.6%、3・4回が9.0%と上位となり、父母ともに読み

聞かせする家庭の方が回数は多かった。これらを合計すると、1・2回が37.3%、7回以上が17.8%、5・6回が14.7%、3・4回が10.2%となる。読み聞かせの理由は、「想像力を豊かにしたい」57.8%、「本を読む楽しさ」38.8%、「言葉の発達」22.0%となっている。

「1・2歳児をもつ家庭における絵本の読み聞かせに関する調査」(武市久美『地域協働』第4号 愛知江南短期大学地域協働研究所 2007年)では講座受講者33名の母親へのアンケートから、読み聞かせの目的は感情が豊かになる・子どもが楽しめる・善悪や思いやりを学ぶなど、頻度は一日に1冊が3割を超えるが2・3冊が3割弱、4・5冊10冊が1割を超えている。読むのは望んだ時か余裕のある時で、蔵書は10冊から40冊で6割以上となっている。数字は一部しか記載されていないが、講座受講者なので、関心が高い保護者が集まっていると思われる。

「保育園児の保護者を対象にした家庭内における絵本の利用状況に関する調査」(駒井美智子『東北福祉大学・大学院紀要』第2巻第1号 2011年)は、保育園に通園する乳幼児の保護者を対象に2年に渡っておこなった1165人と1199人の調査結果である。絵本を読んでいる家庭は2009年81% 2010年82%(以下同)。読む時は希望時が42% 59%、寝る前46%・30%。ただし、いつから始めたかや何冊読むかなどに対する回答は記されていない。

ベネッセのHPでも3~5歳児1000人の保護者対象アンケートとして、平均読み聞かせ時間は5~15分(1~3冊)が半数程度となっており、頻度は毎日が年少時31.5%だったのが、年中・年長になるにしたがって25.5・17.8となるように、段々と減って行く。公文のHPでも「ミーテ」会員対象1128件アンケート(2013年)では、読み聞かせ開始時期を胎教から18.3% 1ヶ月~6ヶ月51.4%、7ヶ月~1歳17.6%と報告されている。会員ということで意識の高い保護者の回答だと思われる。また、広島県教育委員会のHPでもアンケート結果(2013年)が公表されており、読み聞かせ開始時期は0歳19.8%、1~2歳37.9%、3~4歳23.6%とされている。

こうしたアンケート報告の中で、アンケート用紙が明示され、対象人数も多く、また調査結果の数字も明示されており、保育園での絵本のアンケートとして適当だと思われる駒井氏の論文を参考に、本調査ではアンケートを作成した。

三 保育園での調査

調査方法

対象 福岡市A区の認可保育園保護者
有効回答数2573人

調査時期 2013年6月

調査方法 質問紙を配布し、家庭で記入。後日回収。

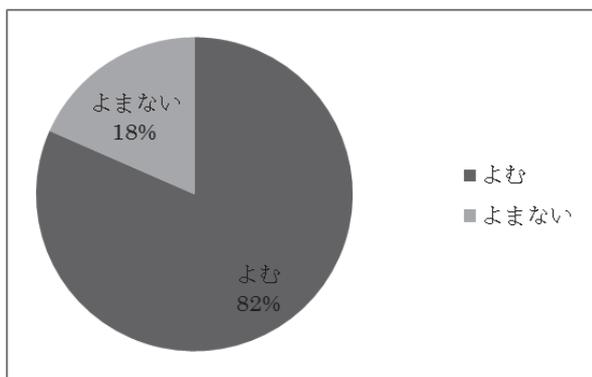
アンケート内容

- ①ご家庭でお子さんに絵本を読んであげていますか。
- ②週に何回読んでいますか。
- ③1回に何冊読んでいますか。
- ④どんな時に読んでいますか。
- ⑤お気に入りの絵本は何ですか。またその理由はどういう事ですか。
- ⑥何才から読み聞かせを始めましたか。
- ⑦絵本はどのように入手していますか。
- ⑧絵本選びのポイントは何ですか。
- ⑨保育園からの働きかけによって、読み聞かせについての意識の変化はありましたか。
- ⑩どのような変化がありましたか。
- ⑪絵本は何冊程度持っていますか。
- ⑫その他絵本について考えていることをお聞かせください。

アンケートの回答結果および各項目に関する考察は以下の通りである。

①ご家庭でお子さんに絵本を読んであげていますか。表1のようになる。

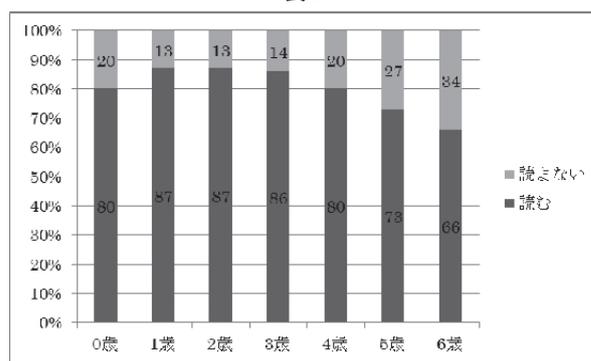
表1



読んでいる82%、読んでいない18%。読んでいる家庭の割合は先行研究と同様の結果であり、一般に思われている「働いている保育園の保護者は育児において教育を怠る傾向がある」という先入観に反する高い割合だと言える。読んでいない家庭の理由は、「時間がない」(11%)「子どもに興味がない」(2%)「自分で読むから」(2%)などで、「兄姉が読んでやるから」「たまにしか読まないから」などという消極的な読み聞かせ理由が2%あり、これらを「読んでいる」に入れれば84%になる。自分で読めるようになってもしっかり読み聞かせは必要であり、こうした家庭には指導が必要だといえる。

また、読んでいない家庭の年齢別割合は、表2のようになる。

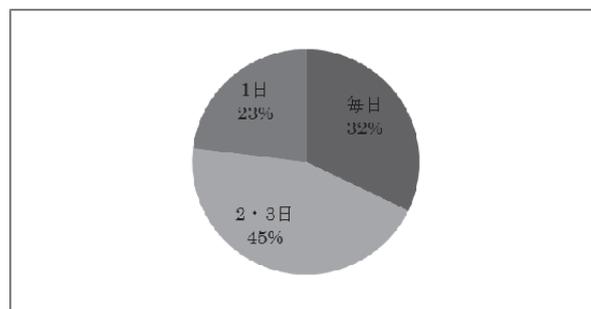
表2



0歳はまだ聞くことができないという判断だろうし、4歳頃から他のものへの興味が増えるとともに、段々と自分で読めるようになってくるから読み聞かせの割合が減るのだろうという推察ができる。

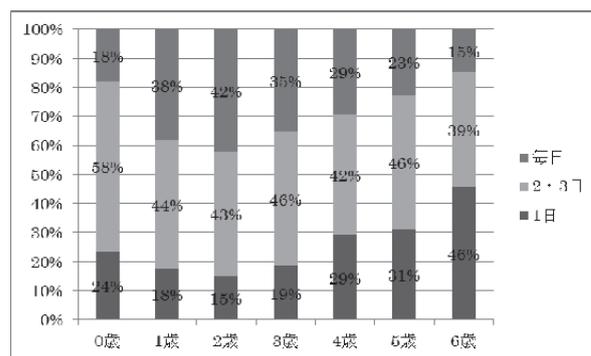
②週に何回読んでいますか。表3の通りである。

表3



週に1日が23%、2・3日が45%、毎日が32%。これもまた、予想以上の割合で、三分の一の保護者が毎日読み聞かせをおこなっている事になる。1週間に毎日から2・3日が8割近く、先行研究と同様の傾向を示している。年齢別では、表4のようになる。

表4



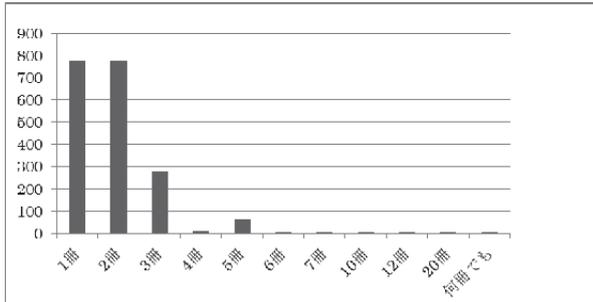
このように、読み聞かせ日数が多いのは1歳～3歳であり、4・5歳と少なくなり、0歳と6歳ではかなり少ない日数となっている。この理由は、0歳ではまだ読み聞かせはむずかしいという既成概念が働き、以上児になるにつれて、他の遊びが多くなることもあろうが、自分で読めるようになるということも関係しているであろう。

この質問項目には、その他や時々という項目がなかった。そのため、時々しか読み聞かせしない保護者は、し

ていないにチェックすることになったと思われる。

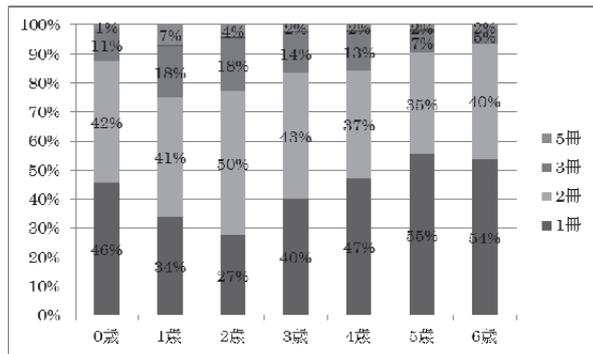
③ 1回は何冊読んでいますか。これは表5のようになる。

表5



1冊が40%、2冊が40%、3冊が15%で、中には10冊。20冊という保護者もあった。この質問項目も少し問題があった。というのは、特に0～2歳児は同じ本を何度も読んでくれと言う要求が多いので、「延べ何冊か」という質問が正しいと思われる。年齢別では表6の通りである。

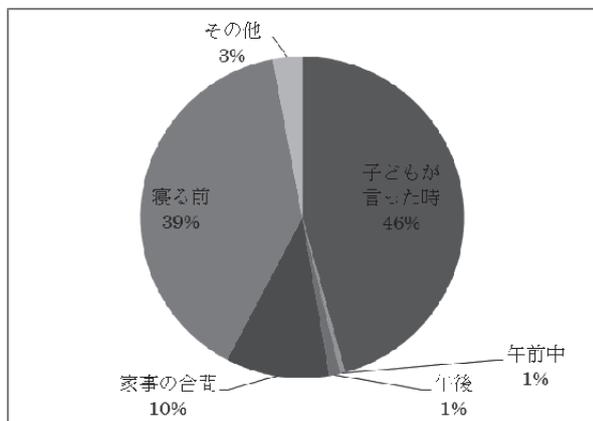
表6



1・2歳が少し冊数が多く、5・6歳が少なめという違いがわかる。実は1・2歳の親には6冊7冊10冊あるいは飽きるまで読むという回答もあり、やはり、1・2歳の頃の読み聞かせ冊数は多い傾向があるようだ。

④ どんな時に読んでいますか。この回答には複数回答が多く見られるが表7のようになる。

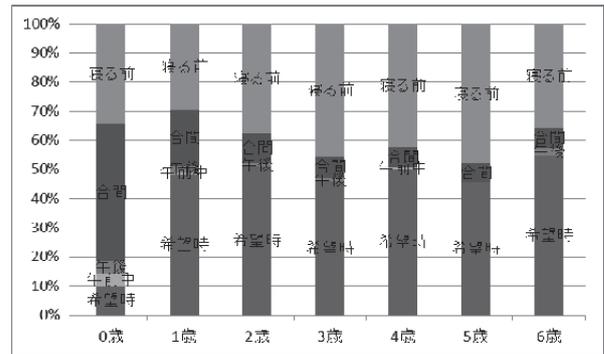
表7



「子どもが読んでと言ったとき」が多く46%で、寝る前というのも39%、家事の合間は10%であった。これも

先行研究と同様である。午前中や午後というくくりは、保育園の保護者に向けてはあまり適当ではなかったと思われる。この項目を入れたのは、保育園における読み聞かせ活動を調査する折に、どの時間帯で読み聞かせを行っているのかが、子どもの集中力との関係で大切なためであった。保護者には不適切な選択肢だと言える。年齢別では表8のようになる。

表8

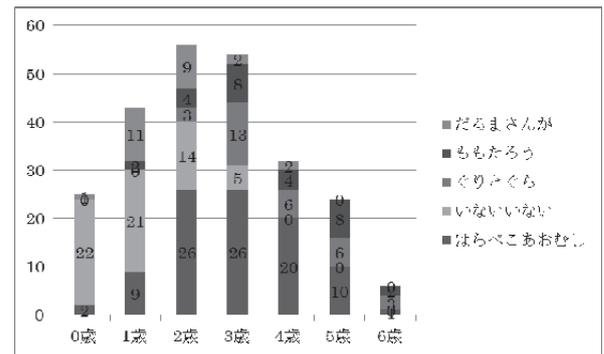


寝る前の割合は大体変わらず、0歳では「家事の合間」が圧倒的に多いが、年齢が上がるにつれて合間よりも子どもの要求に従う形が多くなっている。

⑤ お気に入りの絵本は何ですか。またその理由はどういう事ですか。

好きな絵本の種類は多岐に渡る。一番多い『はらぺこあおむし』でも4%、次が『いないいないばあ』2%『ぐりとぐら』『ももたろう』『だるまさんが』1%ずつとなっている。絵本の好みは一致することはなく多岐に渡るということである。年齢別で上位絵本をあらわすと、表9のようになる。

表9

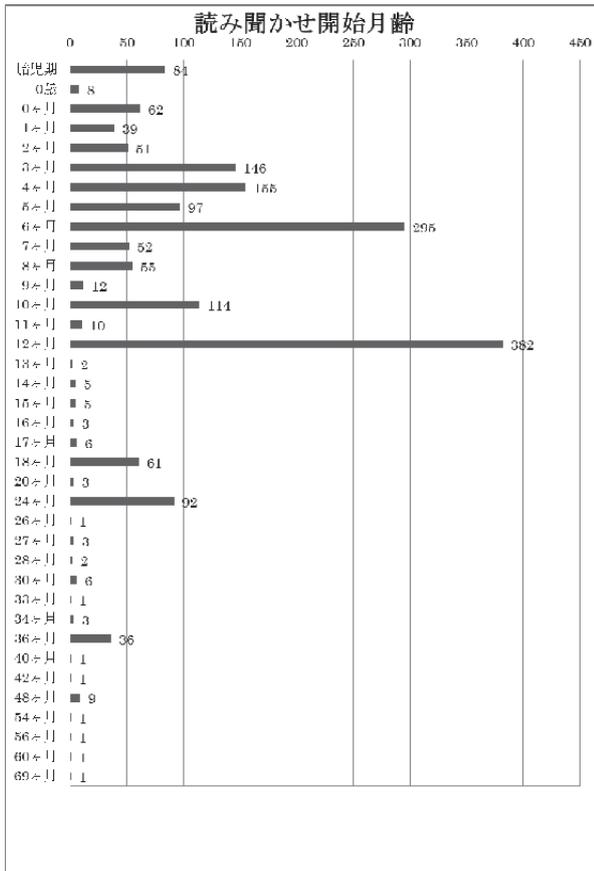


多いものを年齢別で確認すると、0歳から1歳は『いないいないばあ』2歳から5歳は『はらぺこあおむし』となっている。

⑥何才から読み聞かせを始めましたか。

読み聞かせ開始年齢は 表10のようになっている。

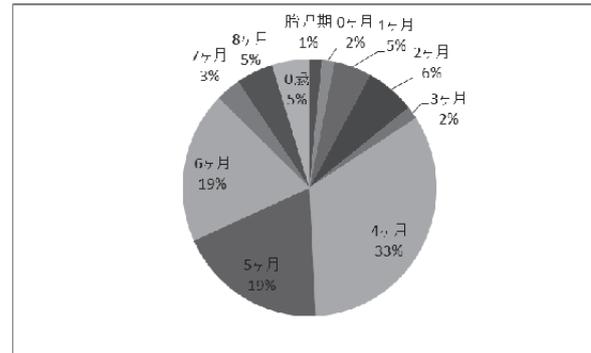
表10



この表のようになるが、これに関しては未回答が多く全体の21%となっている。未回答数を除くと、0～5ヶ月27%、6～11ヶ月26%、12～17ヶ月20%、18～23ヶ月3%、24～29ヶ月5%。未回答数を含めると0～5ヶ月21%、6～11ヶ月21%、12～17ヶ月16%、18～23ヶ月2%、24～29ヶ月4%。これらの数字は、先行研究と比べて高い数字だと言える。まとめて考えるとわかりやすいが、0歳のうちに読み聞かせを始めた保護者が半数を超えて58%であり、1歳台が23%、つまり86%の保護者が0～1歳で読み聞かせを始めているわけである。先行研究と比較しても、本調査区域の保護者の絵本に対する関心の高さが窺える結果だと言える。これを年齢別に表示してみると以下の通りになる。

0歳

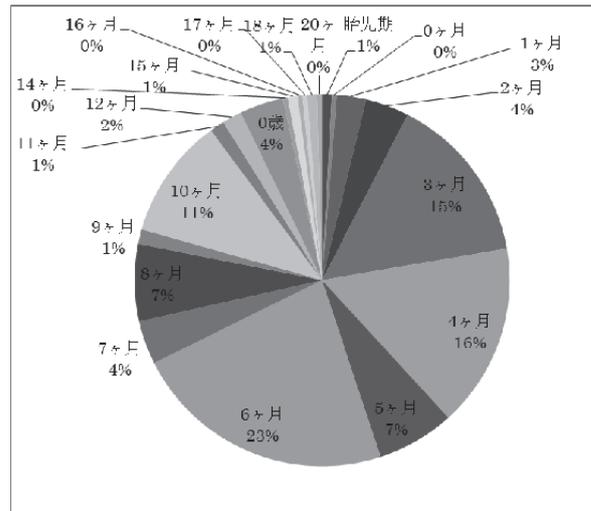
表11



0歳がこのようになるのはあたりまえだが、読み聞かせをしているのが8割を締めているのだから、この表以外は2割しかいないと考えると高い数字だと言える。

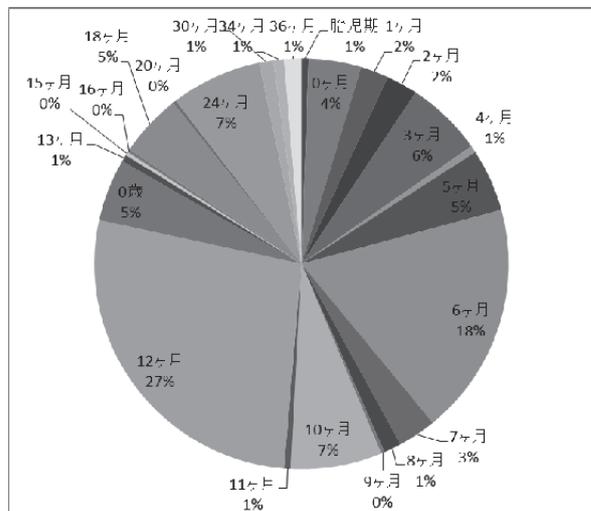
1歳は表12のようになる。ほとんどの家庭が1歳までに読み聞かせを開始している。保護者の関心の高さが窺える。

表12



3歳は表13。1歳を越えた読み聞かせ開始は15%に過ぎない。

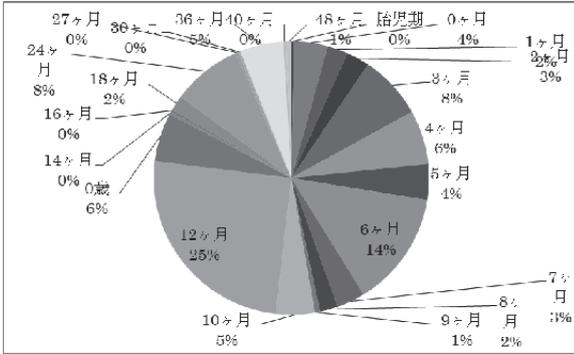
表13



5歳での読み聞かせは表14で、さすがに保護者の記憶

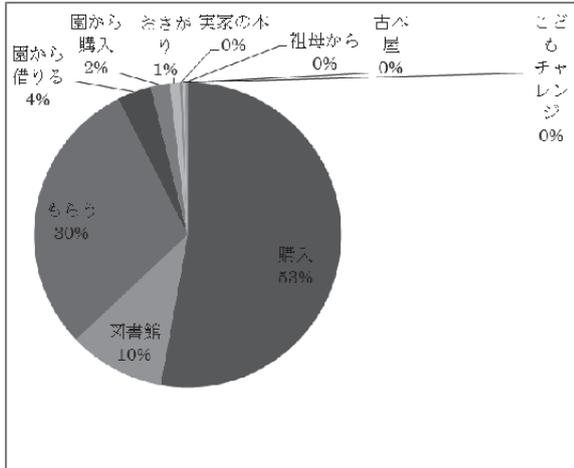
の曖昧さも手伝っているように思われ、3・6・12・24ヶ月といった区切れ目の数字が多くなっている。それでも、1歳以前の読み聞かせが8割を越えており、高く評価できる。

表14



⑦絵本はどのように入手していますか。表15に示している。

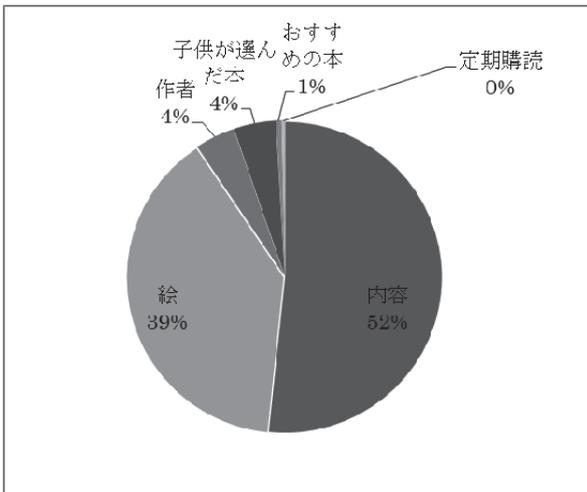
表15



購入しているが53%、もらっているのが30%、図書館から借りているのが10%という結果で、購入している家庭が予想以上に多かった。

⑧絵本選びのポイントは何か。表16の通りである。

表16



内容が52%、絵が39%というものがほとんどであり、いわゆる文と絵から選択するというオーソドックスな回答だと言える。

⑨保育園からの働きかけによって、読み聞かせについての意識の変化はありましたか。

これについては、各園様々な働きかけがあっている中でアンケートだが、それによる変化かどうかの見極めが難しかったと思われる。賛否が40% 37%と拮抗し、不明が23%となり、親の判断も複雑だったと思われる。各園における家庭への発信内容や方法は統一されておらず、一律ではないため、保護者の回答もまちまちになったと考えられる。

⑩どのような変化がありましたか。

具体的な内容は省略するが、様々な回答が寄せられ、こうした活動・園からの働きかけによって意識が新たになり、絵本に対して積極的に向き合う家庭が増えたことが察せられる内容が多かった。ノーテレビデーという小中学校の活動に合わせて絵本を読むという内容があったことも、保育園児にまで影響があったことがわかり興味深かった。

⑪絵本は何冊程度持っていますか。

表17

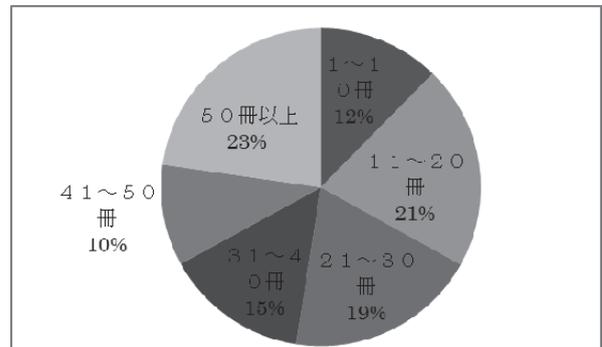
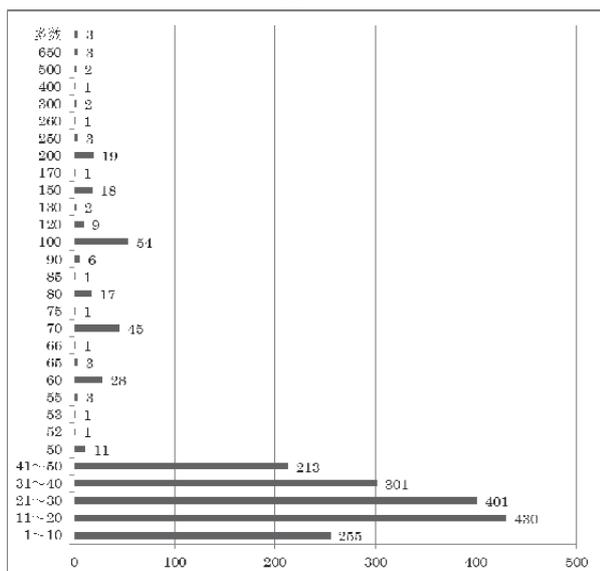


表17のようにあり、50冊以上が最も多い結果となっている。平均は35冊となり、他の先行研究と同様の蔵書数だと言える。細かくみると、表18のようになる。多い家庭も少数ながらあるものの、50冊以内の家庭が多く、10冊以内が1割を越えているのも気になる所である。年齢別には1歳の家庭が少し少ないのではあるが、他には年齢間に差はないと思われる。

表18



⑫その他絵本について考えていることをお聞かせください。

これについての内容は省略するが、子どもに対する親の思いが綴られ、誠に愛情を感じる内容だと言える。

以上が、福岡市の保育士会における調査内容だが、先行研究と同様の結果が多いとは言えるものの、保育園の調査でこれだけ多い数の回収があり、細かい数字が公表されているものは少ない。保育園の保護者が家庭でも読み聞かせに積極的であり、0歳台から読み聞かせを初めていることがわかる。一週間のうち、毎日から2・3日の読み聞かせ家庭が多く、1回に1・2冊の本を寝る前か子どもが望んだ時に読み、本は購入するかもらう場合が多く、蔵書数は平均35冊程度ということになる。

四 幼稚園での調査

調査方法

対象 C市の私立D幼稚園保護者 回答数85人

調査時期 2016年7月

調査方法 質問紙を配布し、家庭で記入。後日回収。

①ご家庭でお子さんに絵本を読んであげていますか。

表19

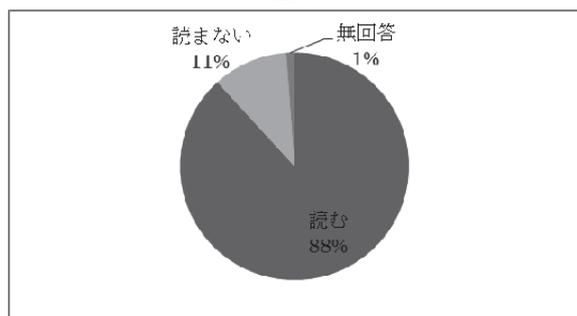
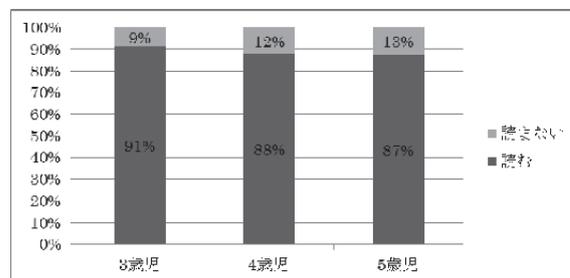


表19のように、保育園よりも高い確率で読んでいる。しかし、②の質問の選択肢に「その他」を入れたために、

保育園で「読まない」と答えたのと同じような家庭が読む方に入っていると考えられる。そう考えると差はないのかもしれない。年齢別にみると、(表20)のようになる。

表20



全体に違いはないが、年齢が上がるにつれ、少しずつ読まない家庭が増えている。

②週に何回読んでいますか。

表21

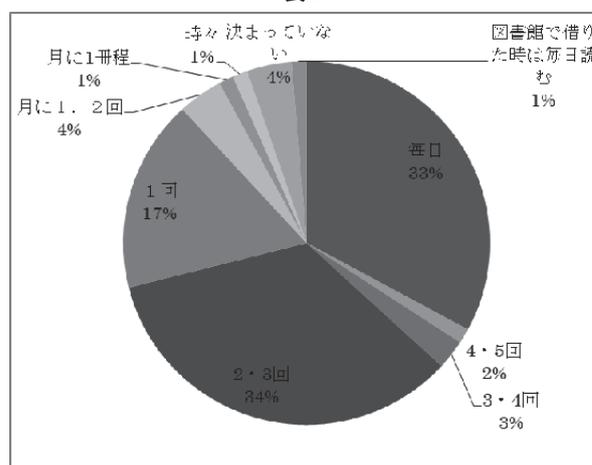
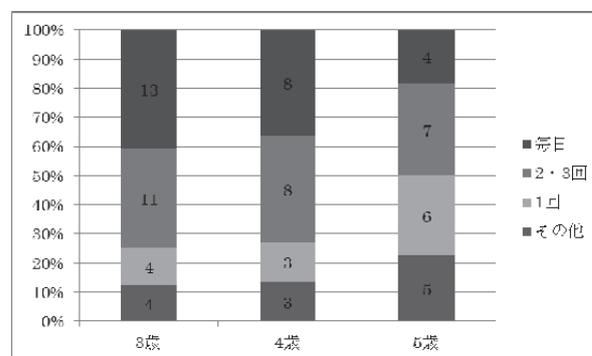


表21のように、毎日3割を越えているが、毎日から2・3回で7割を越えている。しかし、16%がその他になっており、保育園と単純には比較できない結果となった。年齢別でも表22のように、同様の結果が出ている。

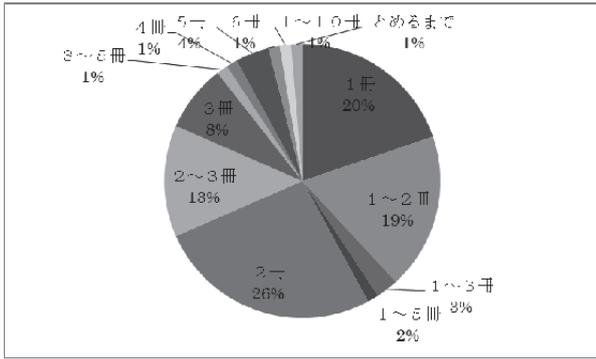
表22



③1回に何冊読んでいますか。

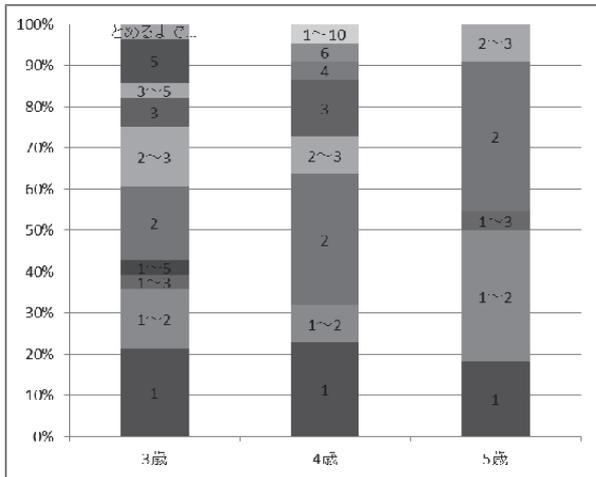
この質問に対しては、自由記述にしたため表23のように、細かい数字が出てきた。しかし、大体1~3冊の間がほとんどのようである。

表23



これを年齢別に見てみると5歳が少し少なめになるということがわかる。

表24



④どんな時に読んでいますか。

表25

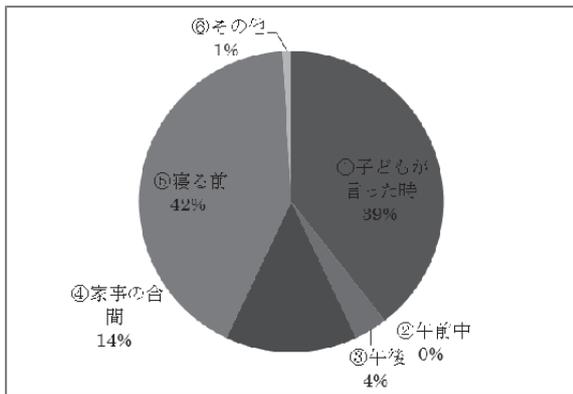
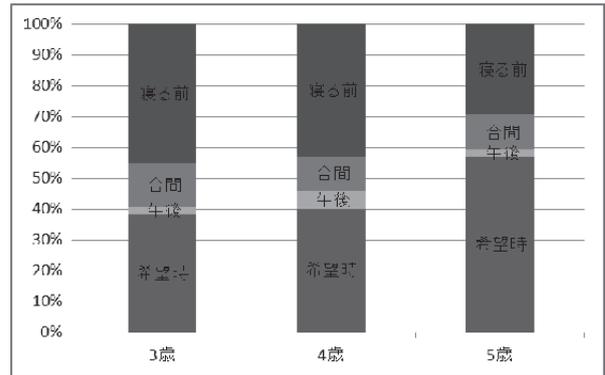


表25のように、読む時間帯は保育園とあまり差異はない。年齢別では表26のように、年齢が上がるにつれて、寝る前よりも望んだ時が多くなっている。

表26



⑤子どものお気に入りの絵本とその理由を教えてください。

好きな絵本は、『はらぺこあおむし』(7)『ちょっとだけ』(3)『きんぎょがにげた』『しろくまちゃんのホットケーキ』『だるまさんが』『ミッケ』(2)などであり、一致するのは『はらぺこあおむし』『だるまさんが』くらいである。調査が一園ということで、保育者の読み聞かせ動向などからの影響が大きいとは思われるが、『はらぺこあおむし』がやはり一番多いというのは他の調査などを見ても納得できることである。

⑥何才何ヶ月頃から読み聞かせを始めましたか。

表27

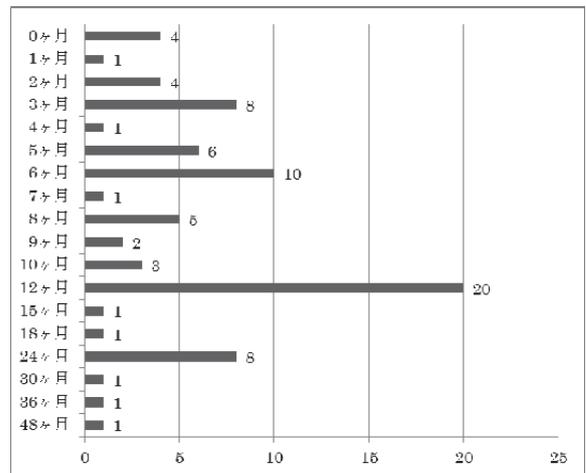


表27のように、保育園が6ヶ月・12ヶ月に二つのピークがあるのと同じで、似た形のグラフだと言える。これも、早い段階の読み聞かせがおこなわれているという結果だと言える。

⑦絵本はどのように入手していますか。

表28

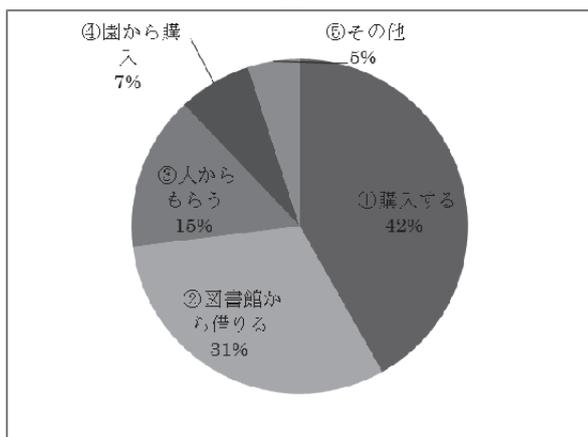


表28のように、「購入する」と「図書館から借りる」で7割を越えている。保育園は図書館の割合が低かった。これは平日図書館に行く時間がない保育園の保護者との違いだと言える。ただ、この幼稚園の近くに図書館があるということもあり、あるいは特異な状況から生まれた結果かもしれない。

⑧誰が主に読んであげますか。

この質問項目は保育園では省略されたものだが、やはり興味があるので入れてみた。質問項目としては複数回答にしている。

表29

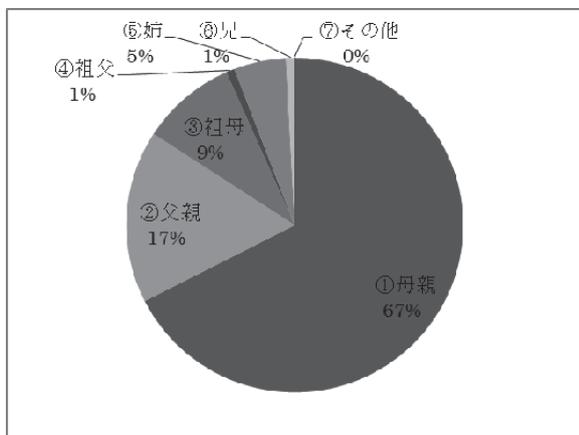


表29のように、父親の育児がクローズアップされているが、やはり母親が多く、祖母もかなりの数である。とはいえ、父親が2割近くいることは育児に積極的な父親も一部にはいることがわかる。おそらく保育園で調査をすれば、かなりの割合が見られるはずである。

⑨絵本選びのポイントは何ですか。

表30

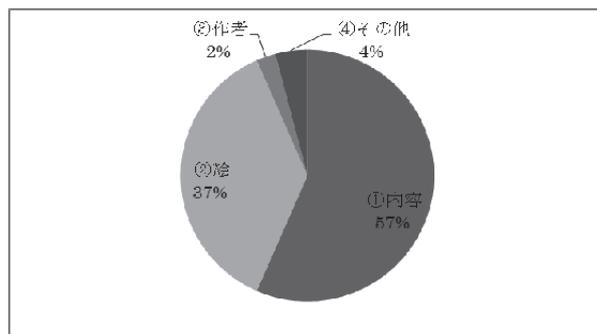


表30のように、やはり文と絵という回答となっている。これも同様である。

⑩絵本は何冊程度ありますか。

表31

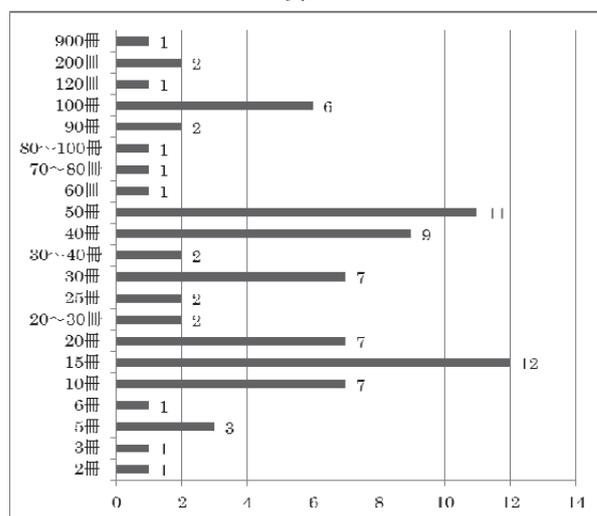


表31のような結果になっている。平均は52冊であり、蔵書数はかなり多いと言える。ただし、これは900冊所蔵という異例な保護者がいるためであり、これを除くと41冊となる。それでも、保育園の調査より蔵書数は多いことになる。

五 おわりに

保育園と幼稚園という境目がなくなり、幼保一元化の掛け声のもと、認定子ども園の増加という現状が生まれている。そのような状況とは全く関係なく、子どもたちは毎日元気に遊んでいる。そのような中で、家庭における読み聞かせの調査を通して言えることは、保護者が仕事に従事するため育児に時間をかけることのできない保育園と、誰かが育児をすることのできる幼稚園という、本来全く異なる育児状況であるはずの両者の育児行動には、ほとんど差がないという事である。

ただ、今回の幼稚園の対象児数は保育園と比べると非常に少ない数であった。このことは反省すべき内容で、今後幼稚園に対する調査を広げていくべきだと考えてい

る。また、保育園の場合は園から保護者への、絵本の読み聞かせに関する働きかけが多くあっており、調査した幼稚園はそうした活動がほとんどないという状況だったということも、結果に影響を与えた可能性もある。そうした各園の活動も合わせ考えながら今後の研究を進めて行きたい。

とはいえ、保育園の保護者は育児をする時間がないという固定概念は全くの間違いであることが、この調査により明白である。仕事を持っている保護者は、仕事の合間をぬって子どもたちに絵本の読み聞かせをしている。出産後は育児の大変な毎日の中、早い段階で読み聞かせを初めている。その状況は、幼稚園の保護者と何ら変わることがない。ただ、両者ともに問題になるのは、残る2割弱の家庭である。読み聞かせに消極的な保護者への指導が現状での課題だと言える。絵本の読み聞かせを勧めていくことは、家庭の育児に対する支援の一環として大切な事である。

早くからの読み聞かせは予想以上の結果であったし、また、子どもとのアタッチメントの形成にも役立っていると思われる。0歳での読み聞かせは、親子の間の関係を作ることに役立つし、保護者の育児ストレスの軽減にもつながると思われる。今後は、幼稚園・保育園における絵本利用と言葉の発達について、さらなる調査を続け、その中で集団保育に対する提言を続けていきたい。